

伊平タケ
聞き書 越後の瞽女こぜ



平タケ
き書 越後の瞽女



鈴木昭英
松浦孝義
竹田正明
編

講談社

鈴木昭英 昭和七年新潟県長岡市に生まれる。大谷大学大学院博士課程修業。現在長岡市立科学博物館館長。宗教民俗学専攻。日本民俗学会、日本宗教学会会員。
松浦孝義 昭和十一年新潟県柏崎市に生まれる。早稲田大学第一政経学部卒業。昭和三十四年読売新聞社に入社、浦和支局、地方部、社会部を経て、現在婦人部記者。
竹田正明 昭和十三年新潟県柏崎市に生まれる。横浜市立大学文理学部を卒業。昭和三十七年東急観光株式会社に入社。現在同社勤務。日本観光通訳協会正会員。

伊平タケ聞き書 越後の警女	著者 鈴木昭英・松浦孝義・竹田正明	発行者 野間省一	発行所 株式会社 講談社 東京都文京区音羽二―一二―二二 〒一一二一 振替東京三九三〇 電話 東京九四五―一一一（大代表）	印刷所 信毎書籍印刷株式会社 製本所 黒柳製本株式会社 第一刷発行 昭和五十一年二月二十八日	 ©鈴木昭英・松浦孝義・竹田正明 昭和五十一年
---------------	-------------------	----------	--	--	--

伊平タケ

聞き書 越後の瞽女

目次

まえがき

私の生いたち（五歳で失明して・盲目の失敗・私のゴゼ入門）	10
門付けと宿（門付け唄・宿とお礼）	21
行と縁起（門付けの行・縁起と花読み）	28
ゴゼの功德（心付けの米、銭、紙・ゴゼの米と糸の魔力）	36
肩の荷物と三味線（杖を使わないで・三味線）	43
ゴゼの起源（ゴゼの由来・妙音講のゴゼ縁起）	50
年季明けの儀式と米山（妙音講・最後のゴゼさん・長岡ゴゼと高田ゴゼ）	60
上州への旅（ゴゼの足跡・群馬での一日・蚕が好きなゴゼさん）	75
恐しい三つの思い出（幽霊の接待・私への求婚事件・殺人事件）	89
唄の種類と記憶法（私の覚えた唄、祭文松坂、口説き、端唄ほか・唄の記憶法）	98

新保広大寺と万歳（新保広大寺・万歳）	109
私の結婚と不幸（幸福の中の不幸・主人の死と米騒動）	118
門付け以後（座敷ゴゼさん・喜ばれたマッサージ・按摩哲学・あねさん頑張る・私の月下氷人）	128
戦前の放送と舞台（愛宕山が出来て三年目）	142
越後から東京へ（上州を越えて・吉田拓郎との出会い）	149
無形文化財と勲章（無形文化財にびっくり・こんどは勲章）	156
私の中の極楽（お医者さんとの対話・針に糸が通る話・難しい常盤津・私の仕方なしの極楽ほか）	164
瞽女唄聞き書（佐倉宗五郎一代記・小栗判官・平井権八・上原口説き・お筆口説き・婚礼松坂ほか）	175
伊平タケ年譜	228

まえがき

三味線の音に合わせ、「平井権八」「八百屋お七」「葛の葉」などの語り物・はやり唄・民謡などを歌って、村から村へと歩く盲目の女旅芸人——瞽女さん。それは、かつて日本の広い地域に数多くの仲間組織があり、庶民に限りない娯楽を提供してきたものである。しかし、近代に入ってから次第にすたれ、その遺風はもう越後にだけしか見ることができなくなった。その越後でももうごく僅かで、後継者もなく、今後十年か二十年か先には、完全にその姿を消してしまうはずである。

そうした「風前の燈」ともいえるゴゼさんたちに対する関心が、ここ数年来急激に高まってきている。ゴゼさんをテーマにした出版物、テレビやラジオ番組、レコード、新聞や雑誌記事などばかりの数にのぼる。そして公演の機会があると、多くの人たち、とりわけ若い世代の人々が集まってくる。静かなゴゼさんブームといつてよいであろう。

数少ないゴゼさんの芸を現代に伝える一人に、伊平^{いひら}タケさんがいる。明治十九年一月、新潟県刈^{かり}羽郡の山村に生まれた。もう九十歳をすぎ、一メートル四十センチ足らずの小身ながら「頼まれれば越後から米つきに」のたとえ通り、かつて越後や上州の村人たちの前で披露した芸を、二時間でも三時間でもやっつてのけるタフなおばあちゃんである。年代を感じさせないほど現代風俗もたくみに取り入れた、明るくそしてユーモアたっぷりの語り口。一度聞いた人は、ただびっくりし、やが

て、その芸の魅力にとりつかれてしまう。

これまで、越後のゴゼさんといえば、長岡と高田のゴゼさんだけにスポットがあてられてきた。長岡には、かつて代々、山本ゴイを襲名するゴゼ頭のもとに替女屋敷があり、明治の最盛期には四百人以上のゴゼさんがいたといわれる。今その流れをくむ三人が、越後の村々をまだ歩いておられる。中静ミサオさん（大正元年生れ、三島郡越路町飯塚）と金子セキさん（同二年生れ、同町岩田）の二人と、手引きの関谷ハナさん（明治四十二年生れ、同町山屋）である。

また、上越市の高田にも、明治時代百人近いゴゼさんがいたといわれるが、今は師匠の杉本キクエさん（明治三十一年生れ、上越市東本町四の九九の一）と弟子の五十嵐シズさん（大正五年生れ）、手引きの難波コトミさん（同四年生れ）だけとなって、たった一軒の替女屋を守り続けておられる。すでに門付けには出ていないが、熱心な理解者もあって、越後ゴゼといえば「高田の三人」といわれるほどに有名である。

これに対し、伊平タケさんはやや異色である。刈羽郡を本拠地とし、中越から北関東を活動分野とした刈羽ゴゼの最後の人であるばかりか、昭和二年J O A K から二回にわたって全国放送し、さらに当時レコードも吹き込んだ経験もち、おそらくマスコミに紹介された最初のゴゼさんであろう。かつてゴゼさんは、徒弟制下の厳しい掟のもとで一生涯独身を守り修行を続けてきた。伊平さんは縁あって結婚をされ、後に越後を離れた。その意味から厳密に言えば、元ゴゼというべきであるかもしれない。しかし、杉本キクエさんとともに昭和四十五年四月には、国の無形文化財伝承者として選択を受け、四十八年十一月には黄綬褒章受章の栄に輝やいた。

「もう歳を取り過ぎてサ、さまざまでもねえことを、いつべえ覚えたけども、もうメシ食い虫になって、みんな忘れてしもたデ。モーゾコキ（ボケてしまった人）になりましたデ」

などと、伊平さんはいう。でも、九十歳を過ぎた現在、八十年も前のゴゼさん修行時代から、唄の文句、昭和初期のラジオ放送のことまで、実にあざやかに記憶され、つい昨日の出来ごとのように、よみがえらせてくれる。

娘時代きびしい修行で積み重ねた唄の数は、おそらく三日や四日、たとえ休むことなく語り続けたとしても、とうてい終らないほどであろう。

いったい、あの記憶力の確かさはどこから来たのだろうか、どうして唄と三味線をマスターされたのだろうか。かつての修行や門付けの旅とは、どんなものだったのだろうか。

かつて盲目の琵琶法師によって唄われ続けた平曲が、数少ない研究家によって辛うじて伝承されているように、わが国の民謡の源流ともいう語り物の一つである替女唄も、この伊平さんたちの限られた生証人の口から純粹に聞かれるのも残り少ない。

本書は、やがて消え去るであろうゴゼさんの生活と明治以来のゴゼさんの歩みを、伊平さんの口から数年間にわたり直接語っていた内容をもとに、これに若干の解説を加えながら編集した聞き書き集である。伊平さんの越後弁まる出しの語り口を生かすよう、できるだけ手を加えないように心がけたが、訛りや言葉の省略などの部分は（ ）でその意味を補った。編者の一人鈴木は、越後を中心にゴゼの歴史や組織などを研究しており、論文「刈羽替女」（長岡市立科学博物館研究報告 第八号）に負うところが少なかった。

また、本書に収録したゴゼ唄の聞き書も、松浦・竹田が集めたものの他に、同書に発表したものを含んでいることを付記しておく。

本書は、すでに齡九旬を超された伊平タケさんの熱心な御協力によって完成した。編者一同心から御礼を申しあげる次第である。

昭和五十一年一月

編者代表 松 浦 孝 義

装丁
坂本東城子

伊平タケ 聞き書 越後の瞽女

私の生いたち

五歳で失明して

わたしはね、いい案配に、親が盲の子産んだんじゃねえ。目の見える子、産んでくれたんだども、五つの歳、ハシカでね、目が見えなくなっただから。だから、本当にどうしょもねえことだけでも、まあ終えたことだけでも。

* *

伊平タケさんは、明治十九年一月三十日、新潟県刈羽郡油田村（現刈羽村大字油田）で生まれた。父丸山奥次郎、母チヨの次女で、本名ソイ。父は大工の棟梁だったが、二歳のときに死亡。農業を営むチヨのもとに育った。そのころ、油田は戸数八十二、人口五百五十三人の純農村であった。数え五つ（明治二十三年）の春、ハシカがもとで盲目となった。

* *

わたしの親がね、「どうしてこの子は、目をかがつぽい（まぶしい）ようにしちゃ、すまっこ行ってるが、どういんだろうや（どういうわけだろうか）」といって目を開けてみて、「はあ。こりゃ、何だこんでや、病めたんだろか。掻いたこんでや、目が痛んでら」なんていって、それからお医者へ連れて行きはじめて……。

その当時は、乗り物がないから、おっかさんがおんぶして、そして、人を頼んでムスビ担ぎして。七日市のお医者さんだの、また柏崎の町でも下の方のお医者だの、上の方へも行けば……。まあ、いろいろお医者さんへ行きましたテ。蒲原のユノズ（西蒲原郡吉田町米納津か）てやらどこのお医者さん、あの、でっかい信濃川を舟に乗って行きましたしサ。

あのう、今だったら、切るとか荒療治がありますし、お医者さんの腕も秀れていきますし、いい薬もありますけれども。ただ、そんときは、

「水を飲ましちゃんらんスケ（から）、煮たったお湯（わかしたあつい湯）飲ましておけ」

「いやっ、何でも油もん食わしちゃんらんで。生ぐさもん（魚類）食わしちゃんらんで」

「サラサラしたオカユ煮て、重湯（おもゆ）みていにして、塩をかけて、なめさしておかしえ（なめさせておきなさい）」

なんていわれて、もう少しで死ぬどこへ行っただです。そして、イグレのお医者さんへ行ったら、「もう十日早く連れて来てもらえば、片目ぐらいは助かられたがな」といいなしたので、親がそこで、さんざ泣いてきました。

家へ来て、孫ばあさん（祖母）と親が、泣いていたら、「泣かんでなさい。今に大きくなって、おシマさんやおタエさん（共に姉さんにあたる）くらいになったら、また見えるようになるんだスケ。泣かんでくんないせいでいいった。これだけは覚えてた。

「おやまあ、この子、可愛想な。今に大きくなったら、見えるようになるだろ、と思うだろか」と、親が泣いていましたっけ。

その後、「食べてえモン食べさせなせえ」と、何でも食べさせるようになったら、食べモンのおかげでねえ、命と目を代えてしまいました。

盲目の失敗

わたしの村は大村でないけども、いい村で、人心のいい、みんな気心のあったところだから。わたし、目が見えねえたって、誰も馬鹿にしねえし、いじめもしねえ。あるときさ、「おタケさ。お前の家の裏にね、いっぺえ西瓜がよんでる（よく熟している）で、もいで食べちゃ悪いけえ」と、近所の子どもがいうたから、「もいで食べてもいいで。もいできなさい」というた。

真っ赤でねえ西瓜をもいできた。わたしは、目が見えねえたって、勘がようて、何でもしられっから、「包丁持ってこーい。オーイ」なんていって、包丁持ってきてもらて、割ってかじりついてみたんだが、まだよまんて、ああま（甘く）もねえし、おいしくもねえ。「こら、ダメど。まっと太っさい、いいの持ってきて来い」

「ヨーシ、今度はどうだ」

そりゃ、持ってくるのは、まだ子どものがんで、わけもわからずもいでくる。二十も三十も持ってきて、それみんな割ったんだが、いくら割ったたて、甘くねえ。そうして親が百姓のことだから、ヤマ（山林や田畑）から帰って来て、

「お前は何しるのだ。お前がね、目が見えねたって、きょうまで三年たとうが、五年たと

うが、盲なんていうたことはねえど。きょうは、このドスメクラ。何だと思てる。こら、カモウリだな」

そんときはじめて、親から頭に、ガーンとはったかれてみたし、真まことから申し訳けないと思つたし、本当に地はだに頭すりつけて「かんべんしてくんなせえ」といいました。はあ、カモウリてのはね、丸い西瓜に似たウリでね。漬けて食べられっし、サンバイ（三杯酢）なんかせば、うんめえ。

「かんべんしてくれたって、これみんな川に流し行つてこねば。誰がみんなこれ食うと。こんげんモン始末にならんねっカ」なんて、いわれたことがありますかねえ。

また、春先でしょね。田圃の中に入つて、セリ採りして、

「カアチャン、セリ採つて来たデ」

「おや、この子、セリ採つたて。目が見えねえもんが、どうしてまあ、セリ採つてきたエ。セリと同んなし草があるんだが、どうしたエ。どうもこうもならんようのもん採つてきたか。どら見せやっしえ」と母親が見てくれた。

「おや、まあ。お前、セリばっか採つてきたが、それでも方便のもんだなあ。どうしてわかつたエ」

「わたしやね、わからんときは、鼻で嗅かいで、こうして」

「道理で、お前の鼻の頭は土左衛門どー」

セリはねえ、においでわかるわけなの。「人ののには、ゴミが着いているけども、お前、

一つずつ洗うて採ってきたふうで、きれいだなあ。よし、よし」なんてほめられたこともありました。

* *

かつては、目が見えなくて、物の形は全然わからなくても、若干明るい感じだけはつかめる時代もあった。しかし、瞳孔が破裂してしまった後には、それも全くなかったという。「本当の石メクラというもんでしょ。何にもわからんのだスケ」と、タケさんはいう。

私のゴゼ入門

こうして、ハシカが原因で盲目となった丸山ソイは、その年の秋、ゴゼに弟子入りすることになる。師匠は刈羽郡藤井村（現柏崎市）上藤井の武田ヨシ（安政四年——明治二十六年、享年三十七歳）という人であった。ヨシ師匠の実母が、タケさんの家の近くに後妻として嫁いで来たため、その縁によるものである。

* *

人さんは、ゴゼさんがもらいに来てくれたという、身体もみんなもらいに来たと思ひなせる。でも、そうでなく、弟子、親方という約束をすることなんです。

* *

師匠のヨシは、刈羽郡を中心としたゴゼ仲間の集団の「刈羽組」に所属していた。刈羽組は、野中組、安田組、吉井組、曾地組、下方組、御門先組、上条組、寺泊組など、八つの組から成って